

個々に適した学びを促す授業づくり

～校内研究の成果や課題から～

北海道函館盲学校 教諭 土屋 聡美

1 はじめに

本校の令和3～4(2021～2022)年度の校内研究では、研究テーマを「個々に適した学びを促す授業づくり」として、研究グループでの協議や授業研究を通して、授業の内容や方法の改善を図った。このレポートでは、令和4(2022)年度に対象とした児童生徒の授業研究の一部を紹介し、校内研究で得られた成果や課題を報告する。

2 児童生徒ごとの経過と成果

(1) 中学部2年重複学級：道徳

<生徒の視力などに関わる実態>

	眼疾	視力	使用文字	補助具等
A	遠視性弱視 内斜視	右 0.9(0.6) 左 1.2(0.7) 両 1.2(1.0)	普通文字	なし
B	屈折性弱視 遠視性乱視 先天性上斜筋麻痺 外斜視(右)	右 0.3(0.5) 左 0.3(0.5) 両 0.4(0.4) 最大視認力 1.0(20cm 両)	普通文字	なし

対象の2名の生徒は、日常生活の中で起こりうる状況に対して、相手はどのような気持ちなのか自ら考えることができたが、身近ではない状況の際には教師から説明を付け加えるなど支援が必要であった。一方、日常生活において、テレビやスマートフォンを用いたゲームを頻繁にプレイしていたことから、ゲームに熱中しすぎてやるべきことを忘れてしまうなどの問題が起こりうると考えられた。そこで、道徳科の「節度・節制」に関連した学習において、ゲームに熱中してやめられなくなる状況のドラマを教師が動画で作成して提示し、そのドラマの主人公へのアドバイスを考えることを通して、ゲームのしすぎによって生じる問題点やゲームをするときの注意点について気付かせようとした。

校内公開授業では、ゲームに熱中しすぎることに対する生徒作成のアドバイスの動画を見合い、動画から良いと思った内容を発表し合う活動を実施した。この活動を通して、相手が嫌な気持ちになることを想像したり、やりたいことはやめずに自分のすべきことも行ったりする方法(ゲームの時間を決める、やるべきことを先に終わらせるなど)について考えることができた。動画を制作する際は、演じることを進んで楽しそうに取り組んでおり、テロップをつけたことで文字からもドラマの内容理解が促され、実感を伴う活動として対象生徒の2名にとって効果的な方法だったと考える。

(2) 小学部 1 年重複学級：自立活動

＜児童の視力などに関わる実態＞

	眼疾	視力	使用文字	補助具等
A	視神経の蒼白化 内斜視 眼振	測定不能	なし	遠視用眼鏡 書見台

対象児童はこの年度に本校に入学した小学 1 年生であり、実態把握をしながら学習を進めるため、研究で取り上げることでより多くの視点から意見をもらい、対象児童のより良い支援につなげたいと考えた。そこで、自立活動の「目の使い方や目と手の協応動作」の学習を校内公開授業とし、指導内容を検証してきた。ここでは「見る力」「手の動き」「学習の見通し」の 3 点に関連したことについて紹介する。

ア 見る力について

対象物を見ずに手探りをしたり、視線がすぐに逸れたりする様子が見られていた。そこでこの授業では、よく見せたい教材はできる限り手に持たせたり自分で操作させたりしながら、目を使う機会を増やすよう考えた。転がされた綿缶を追視する、輪を棒から抜く、2 つの箱から鈴の入っている箱を見て中から鈴を取る、指定されたマグネットを取るなどの学習を行うことにより、提示された教材をよく見ようとするようになった。

イ 手の動きについて

手や指先に力を入れることや、右手でスプーンを持ちながら左手で食器を押さえるなどの両手の協応動作が十分にできていなかった。対象児童は見て動きを模倣することが難しかったため、動作を言語化して伝えながら、手を取って動きを教えるようにした。丸めた紙粘土をフォークで刺す、穴にストローを入れる、ミシン目を入れた画用紙をちぎる、ひもにビーズを通すなどの学習を行うことで、部分的に教師の支援を受けながら、親指と人差し指でものをつまんだり、両手を同時に使ったりすることができるようになった。

ウ 学習の見通しについて

学習の導入や展開を毎時間同じ流れにしたり、「今日の課題は 10 個」と終わりを明確に提示したりしたところ、授業時間の間、集中力をあまり落とさずに学習するようになってきた。一方、決めた数の課題をクリアさせるため、自発的な動きを待たずに、教師が次々と課題を提示してしまうこともあった。取り組む課題の数を減らすか、数の提示にはこだわらず「時間が来たら終わり」という約束で取り組むことなどが良いと思われた。

(3) 小学部 1 年普通学級：図工、国語、体育

＜児童の視力などに関わる実態＞

	眼疾	視力	使用文字	補助具等
A	眼皮膚白皮症 遠視性乱視	右 0.05 (0.06) 左 0.05 (0.07)	普通文字	書見台 単眼鏡

	眼振	両 (0.07) 最大視認力 0.2 (2cm 左)	遮光眼鏡
--	----	-------------------------------	------

図工、国語、体育の3教科で授業研究を行った。事前事後の検討を通して対象児童に適した学習の手立てを検討した。グループでの検討を通して、授業研究を行った教科以外でも有効と考えられる手立てを確認することができた。

ア 見え方の課題に対する手立て

対象児の眼疾や視力に合わせるため iPad を活用し、リアルタイムで作品や動きを拡大した映像をモニターに映すことで細部まで観察することができた。また、タイプスコープを活用することで不要な情報をカットするとともに、注視すべき部分を明確にすることで集中して文字を読むことができるようになってきている。

イ 少人数指導に対する手立て

対象児はすべての教科を一人で学習しているため、自分以外の思いや考え方に触れる機会が極端に少なく、「イメージを持ちそれを相手に伝えること」や「他者の考えや思いを受け入れること」が難しい。初めから児童自身に考えさせるだけではなく、教師の考えやイメージを提示してから考えさせることで、様々な考えや思いがあることを知ることができ、そこから自分のイメージや考えを膨らませることができるようになってきている。

ウ 特性に対する手立て

対象児の特性に合わせて1時間の授業の流れや活動内容を明確にすることで、落ち着いて授業を受けることができ、自分で行動できる機会が増え、より良い学びにつながった。また、指示や説明は短く、具体的にしたりチャンク化したりすることで時間が経過しても想起しやすく自信をもって活動することができるようになってきている。

3 3つの視点によるまとめ

ここで紹介した授業の他、中学部では普通学級の理科や重複学級の国語においても授業研究を進めた。校内研究ではこれらの授業の評価と合わせて、「聴覚・触覚活用」「視覚活用」「ICT活用」の3つの視点に沿った成果や課題を検証した。

(1) 聴覚・触覚活用の視点から

教師が例示を見せるだけでなく、言葉での説明を加える、キーワードを設定する、簡潔で分かりやすい文章で伝えるなどの工夫を行うことで、身体の正しい動きを意識してまねたり、学校生活での動作を見て説明する文を作ったりすることができるようになってきた。また、教師やCDでの範読を基にして、内容に応じて声色を変えて読んだり、教師による応答例を聞いて参考にし、教師の質問に対して理由を添えて答えたりすることができるようになってきた。

一方で、範読で聞き取った言葉が頭に残り教科書の文字を追っていなかったり、長い文による説明では最初と最後でつじつまが合わなかったりする様子が見られた。それらに対し、範読を聞く前に児童が読む機会を設けたり、短い文で話すように指導したりする必要があると確認された。

(2) 視覚活用の視点から

教師が見せたい教材等を見やすくするために、学習の順序を黒板に示す、ヒントや大事なポイントをホワイトボードに提示する、興味を引いたり認識しやすかったりする色やキャラクターを使用する、TV 画面にスライド資料や鑑賞作品を提示するなど、様々な配慮が挙げられた。漢字イラストカードにより意味と漢字を関連づけて覚える様子も見られた。また自分の考えを確かめる活動では、ワークシートの活用を通して、教師の少ない支援により生徒自身が書き表すことで考えを深めていた。

一方、体操の動作については、身体を動かしながら覚える、国語の読解では、ペーパサートの操作によって物語の理解を進めるなど、必要に応じて自分の身体を使う活動も合わせて学習を進めることが効果的であると示された。さらに、授業内容で習得したことを他の授業や学校生活の場面でも生かせるようにするためには、支援を徐々に減らしていく必要があることも指摘された。

(3) ICT 活用の視点から

タブレット端末の写真やビデオの機能、または Web ページを活用することで、示された教材や題材に対して興味をもって進んで見ることができたり、自分の動きや音読の記録から自分の様子を振り返ることができたりした。アプリの活用に関しては、漢字練習アプリを使って書き順に沿って書いたり、アンケート作成アプリによる復習テストで自主的に振り返ったり、動画作成アプリで作った生徒自身も出演する創作動画で理解を深められたりすることができた。

一方、タブレット端末は多機能で便利ではあるが、注目させたい事柄によって、動きなら動画(ビデオ)、音声ならボイスレコーダーというように使い分ける必要がある。また端末を使うことで操作に注意が向いてしまい学習支援に役立てなかったり、使用するアプリによっては書いた文字が残らなかったり(自分の文字を読み返せない)、生徒用のタブレット端末にはインストールできなかったり、広告の出方の関係で使いづらかったりしていた。そのため紙媒体など従来の方法に立ち返ったり、類似のアプリを参照したりすることが考えられた。

4 全体を通して

成果として、対象とした児童生徒の実態をとらえながら、学習内容を身に付けさせるための個々に適した学びの方法を様々な視点から考え、より良い授業の在り方を検証することができた。検証した授業においては、児童生徒個々の特性に応じて、視覚・聴覚・触覚のそれぞれの感覚を相互に生かす活動が工夫されていた。ICT の活用でも、様々な活用法の模索がなされていた。この研究活動を通して、グループ研究で検証した教科だけでなく、他の教科の授業や学校生活での様子の変容についてもグループ内で交流できたことが、日々の教育活動を充実させる上でも効果的であったと考える。

課題として、授業構成の関係で身につけさせたい課題に取り組みさせる時間が限られていたり、タブレット端末を活用しても効果の上がない場面があったりしたことなどが挙げ

られた。課題の内容や児童生徒の意欲にもよるが、1回の授業での活動内容やICT活用のメリット・デメリットなどを整理し、自ら操作や試行錯誤をしながら考える時間を考慮することが大事であると考えられた。

5 終わりに

令和4(2022)年度の校内研究では、対象児童生徒を小・中各学部の研究グループごとに選び、さらに学習グループに応じた形態で授業研究を進めることを通じて、児童生徒の実態に応じた授業づくりを検証した。研究で取り扱った教科・領域だけでなく、対象児童生徒の関わる授業全般にも通じる授業改善の工夫にも生かせる研究活動だったと考える。

昨年度の活動を受けて、令和5(2023)年度の研究活動では、「児童生徒一人一人の実態や学習状況を総合的に見据えた上での授業づくりの研究」が引き続き重要であると押さえ、研究テーマはこれまでと同様とした。合わせて、令和4年度からスタートした道内盲・視覚支援学校4校合同での教科等指導サークル研修(8月、11月、1月に3~4時間ずつの研修日が設けられている)などの研究と校内研究とが効果的に結びつくよう調整して、様々な専門性を生かした授業づくりを進めているところである。

少人数でかつ実態の多様化が進む中ではあるが、子どもたち一人一人の成長を願って、個々に適した学びを促す授業づくりを今後も進めていきたい。